

もうひとつのポーランド史

ベラルーシの歴史と伝説

～バルバラ・ラジヴィルの亡霊～

越野 剛

日本人にはあまり馴染みのないベラルーシという東欧の小さな国に私は住んでいたことがある。ポーランドとロシアの狭間といえぼどの辺りにある国か分かって頂けるだろうか。そこで専門調査員という日本大使館のお雇い仕事を2年ほど勤めた。ベラルーシとの外交関係は浅く、あまり日本からのお客さんも来ることはないの、のんびりした日々をすごしていたものだ。あるとき日本のテレビ局から連絡があって何かと思ったら、ベラルーシには美人が多いといわれるが学問的根拠はあるかという質問だった。のんきな話である。春になるとよく電話をかけてくるベラルーシ人もいて、世紀の大発明をしたから日本のテクノロジーでぜひ実用化してほしいという。まったくののんきな話である。

こんなことを書くと国民の税金から給料をもらっているながら何をやっているのかと怒られそうだが、もちろん日々の仕事はきちんとこなしていたつもりである。ただしモスクワとかワルシャワの日本大使館のように神経をすり減らすような忙しさはなかった。そんな私のひそかな楽しみのひとつは、日曜日の朝にベッドの中でぼんやりしながら教会の鐘の音を聴くことだった。よく聴くと鐘の響きには二種類ある。澄んだような余韻を残しながら単調に響くのがカトリック教会、大小の鐘を複雑な音色で鳴り響かせるのがロシア正教会である。自分がまさしくポーランドとロシアの狭間の空間にいるのだなということを実感する、夢うつつのひと時である。

ベラルーシ・リトアニア・ウクライナの三民族は、ロシアとポーランドの二国がその領土をめぐる取ったり取られたりを繰り返してきた歴史を持っている。ポーランドというと大国に運命を翻弄され続けた受難の民族というイメージがあるが、近代以前は東欧随一の強国だったこともあるのだ。ポーランドとロシアという二つの異文化がベラルーシに残した影響はいろいろなどころに見ることができる。例えばカトリック教徒のクリスマスは12月25日だが、ロシア正教徒にとっては1月7日である。カトリックと正教会が共存するベラルーシでは自然とクリスマスを二回も祝うことになる。

ベラルーシの文化はソ連時代にロシアから強く影響を受けたが、独立してからはロシアと違う独自

性があるということが強く言われるようになった。しかしそういうベラルーシ的とされる物も、よく調べてみると今度はポーランドが起源だということも多い。例えばベラルーシでは民族文化復興を願う人たちの間で、「バトレイカ」というクリスマスに演じられる人形劇がちょっとしたブームになっている。これは二階建ての家を模した移動式の箱舞台の中で、聖書のキリスト降誕の場面を演じるものだ。上の階は天界を表しており、天使の人形が登場して「聖なる御子が世に生まれた」と厳かに告げたりする。下の階は人間の世界になっており、悪役のヘロデ王が生まれたばかりのキリストを探して殺そうと企む。

一階部分のシナリオには自由な演出が許されていて、私が見せてもらったバトレイカ劇では、ベラルーシのルカシェンコ大統領そっくりの顔をした人形がヘロデ王を演じていて、独裁的な大統領令を乱発して民衆を苦しめていた。ロシア語とベラルーシ語が混ざったような田舎っぽい喋り口までもがルカシェンコ大統領にそっくりで、最後の場面でヘロデ王が死神の鎌で首をちょん切られると、見ていた子供たちがいっせいに歓声を上げた。

ベラルーシ人がオリジナルな文化遺産として誇るバトレイカだが、これも実はポーランドの「ショプカ」が伝わってきたものだ(さらに元をたどると人形劇の盛んなチェコから来たものらしい)。バトレイカと同じように建物状の舞台でキリスト降誕の場面が演じられるもので、クラクフではヴァヴェル城や聖マリア教会を模したショプカがよく知られている。ポーランドのショプカは人形劇として演じられるというだけではなく、日本の雛壇のような飾り物としても重宝されている。

ベラルーシの古い歴史を見るとポーランドとのつながりはもっとはっきりと見えてくる。ポーランドの独立を守るために戦ったタデウシュ・コシチュシコやポーランドの大詩人アダム・ミツキェヴィチは今日のベラルーシで生まれている。ベラルーシの歴史教科書ではコシチュシコもミツキェヴィチも民族の偉人として紹介されているのだ。この連載ではポーランドがリトアニアやベラルーシとひとつながりの連合国家として栄えていた時代(15-18世紀)を取り上げて様々なエピソードを紹介したい。ラジヴィル家という大貴族(マグナート)の一門が話の中心となる。

彼らはベラルーシとリトアニアに広大な領地を所有しており、もしもベラルーシが独立の王国になる機会があったならラジヴィル王朝ができたろうとさえ言われている。

ぞっとするような復讐譚、ロマンチックな恋物語、こっけいな笑い話など、ラジヴィル家には興味深い逸話や伝説がたくさんあるのでどうぞご期待ください。

バルバラ・ラジヴィルの亡霊

ここではリトアニアの名門貴族ラジヴィル家にまつわる様々な逸話を紹介したい。中世のリトアニア大公国は現在のベラルーシをあわせた大国であり、隣のポーランドと連合王国のかたちをとっていた。そのためラジヴィル家の歴史はベラルーシ・リトアニア・ポーランドの三つの地域にまたがるものとなっている。ベラルーシのちょうど真ん中あたりにニェスヴィシュという小さな町があるが、そこにはユネスコの世界遺産にも指定されている古い城館がある。今でこそニェスヴィシュはのどかなベラルーシの地方都市にすぎないが、かつてここはラジヴィル家の居城だったところだ。バロック風の城館の周りには英国式の庭園が広がっており、観光客はのんびりと散策を楽しむことができる。しかしこの場所には夜な夜な「黒い貴婦人」と呼ばれる幽霊がさまようという言い伝えがある。今回はそんなニェスヴィシュの幽霊にまつわるエピソードを紹介しよう。

16世紀の中ごろ、ニェスヴィシュのラジヴィル家は「黒ひげ」のミコライと「赤ひげ」のミコライとあだ名された従兄弟たちの活躍によって、リトアニア大公国で最も有力な貴族となっていた。赤ひげのミコライにはバルバラという美しい妹がいて、たまたまポーランド王の息子ジグムントによって見初められた。バルバラはリトアニアの首都ヴィリニウスに住んでいたが、やがて彼女の屋敷には夜ごと王子が足しげく通うようになる。噂を聞いてニェスヴィシュからやってきた両ミコライは一計を案じてジグムントが忍んできたところを待伏せして、その場で王子がバルバラと結婚することを強要した。あらかじめ司祭や証人を用意するほどの周到さであった。ラジヴィル一門の娘の名誉が傷つくことを怖れたこともあるだろうが、ポーランド王家との縁戚関係を得る絶好の機会をとらえたと見ることもできる。すでにラジヴィル家の美女に魅了されていたジグムント王子は、結婚の事実を秘しておくことを条件にして両ミコライの要求を受け入れた。

やがて1548年に父王のジグムント1世が死去する。王子がジグムント2世として後を継ぐことになり、バルバラ・ラジヴィルとの結婚を隠しておくわけに

はいかなくなった。議会(セイム)は王族でもないリトアニア貴族の娘を王妃として認めることをしぶった。ポーランドは、王様に対して貴族の力が強かったことで知られている。母のボナ・スフォルツァ王妃も息子の結婚に反対の意思表示をするため、実家のイタリアに里帰りしてしまった。プロテスタントを信奉していたラジヴィル家に対して、カトリックの立場からの敵意もあったようだ。

それでもジグムント2世はなんとか貴族たちを説得して、1550年にはバルバラは新王妃として無事に公認された。ところが喜ぶ間もなく最愛の妻は病に倒れ、翌年にはあっけなく死んでしまう。彼女を憎んだ王母ボナの手先によって毒殺されたとも伝えられている。彼女の遺骸はポーランドの当時の首都クラクフではなく、リトアニアのヴィリニウスに移して葬られた。

この先は伝説にすぎないのだが、悲嘆に暮れる王は黒魔術によってバルバラの霊を呼び出すことを考えたという。そこで登場するのが有名な魔法使いパン・トヴァルドフスキである。悪魔に魂を渡す条件で魔術の知識を得たトヴァルドフスキはいわばファウスト博士のポーランド版である。悪魔の手を逃れて月に移り住んだ話



「バルバラ・ラジヴィルの亡霊」W・ゲルソン画(1886)

は、絵本などで今の子供たちにもよく知られている。トヴァルドフスキは国王に頼まれて、バルバラ・ラジヴィルの故郷であるニェスヴィシュの城館で死者の霊を召還する儀礼を行った。ジグムント2世は美しい妻の面影が薄闇の中に浮かび上がるのを見ると、身動きしないよう警告されていたにもかかわらず我慢できずに立ち上がって亡霊を抱きしめようとした。そのときからバルバラは死者の国に帰ることができなくなり、ラジヴィル家の城館と庭園を永遠にさまよいつけることになった。ニェスヴィシュで開かれる舞踏会の席にあまりにも派手な格好をした女性がいると、バルバラの亡霊が現れて警告したという。いつしか彼女は「黒い貴婦人」と呼ばれ、戦争や災厄を予兆するものとされるようになった。第二次世界大戦でベラルーシを占領したドイツ兵も、ニェスヴィシュで「黒い貴婦人」の幽霊を目撃したという。ジグムント2世とバルバラ・ラジヴィルの悲恋の物語は、ポーランド・リトアニア・ベラルーシのそれぞれでよく記憶されており、小説や戯曲や映画の題材にされている。